

平成 20 年度研究チーム活動中間報告(第 2 回目)

「大学とメディアとの新たな連携を求めて——教育・研究・社会貢献」

No.107 研究幹事 井野瀬久美恵 (文学部)

大学の使命は、大きく、教育、研究、社会貢献から構成されている。本共同研究は、これらをメディアの視点、すなわち、実態・実相とは別次元に（ある意味での）「現実」を創り出している立場から大学という場を見直し、「今大学は何をすべきか」を再考するとともに、甲南大学のブランド力強化を模索したいとの志から立ち上がった。以下、「」付きで使用する「現実」とは、メディアを中心に創造されて一般社会に流布している（いわば）イメージのようなものを指す。このイメージが、当事者（本研究においてはわれわれ大学人）以外には「現実」だと思われていることが多い。本共同研究が問題にするのは、それとわれわれの実態や実相との乖離であり、この乖離のなかにわれわれには見えていない可能性を探ることにしたいと考えている。

1 年目となった 2008 年度は、甲南大学の「今」を見直すために、テレビや新聞の第一線で活躍するメディア人との意見交換をおこない、大学の実態・実相とメディアから見た「現実」とのずれを検証した。「大学人の多くが社会的ニーズを意識した研究をしていない」をはじめ、メディアによる大学の格付けと分節化が進むなか、本学のような私立大学については「教育力が見えない」という痛烈な批判が寄せられた。メディア関係者の意見には、実態・実相を知るわれわれ大学人にしてみれば「まったくの誤解」というものもあったが、誤解という事実自体が、彼らに——ということは広く社会に、大学の実態も実相も見えていないことを示している。そこから生じるジレンマのようなものが、甲南 OB/OG との意見交換でも感じられた。

大学は今どこを見て何をしているのか、大学という場は今の日本社会の求めにどのように応えようとしているのか、あるいは応えていないのか。そもそも 21 世紀の日本社会は「大学」という場に何を求めているのだろうか。教育、研究、社会貢献という大学の使命を「連携」をキーワードに考えた本共同研究会のメンバーには、次第に、こうした問題についてわれわれ大学人が率先して世論にアピールしてこなかったこと、だからこそ上記の意味における「現実」が意味を持つのだろう。昨年秋、民主党政権のもとでおこなわれた「仕分け」という政治ショーのなかで GP やグローバル COE などが次々と減額された事実、しかも仕分け人にわれわれの同業者の割合が高かったことを考え合わせると、世論はおろか、内部に対しても大学人はそれぞれの有用性、存在意義を説明してこなかったことが痛感される。

大学設置基準の大綱化・簡素化以降、毎年のように大学の新設が続くなかで、大学という場の意味もその機能も変化をよぎなくされた。それを今改めて再認識すべきだと、自戒を込めて強く思う。実際、私が入学した 1976 年には 423 校（進学率 27.3%）だった大学

の数は、1996年には567校（進学率33.4%）となり、その10年後の2006年には744校（進学率45.5パーセント）となった。20世紀末から21世紀への世紀転換期に大学増殖のスピードを大幅に加速化されたことがはっきりとわかるだろう。質的劣化、格差拡大という顛末は、当初から予想されていた。にもかかわらず、われわれ自身が、自分の「大学経験」との差に驚くあまり、自分たちの実相がうまくつかめていなかった。変わりゆく大学教育環境のなかで社会に必要とされるニーズを、大学人がうまく伝えてこなかった、いや伝えられなかったのはそのためだろう。その結果、「大学人がアピールしたいこと」と「大学人にアピールしてほしいこと（あるいは大学人がアピールしなければならないこと）」の間にギャップが生じ、それに無自覚なままに、その差が年々拡大していった。それが明確化したことが昨年度の（いわば）研究成果だといっている。

このギャップを正確に把握に、われわれの「今の実践」に生かすこと——これが共同研究2年目となる2009年度の課題であった。具体的には、「大学の出口＝就職」と並んで大学のブランド力強化が試される「大学の入口」を中心にして、「われわれの実相」と「彼らの現実」のずれを多様に探ることを試みた。言い換えれば、われわれ大学人は、今の高校生の実態・実相を知ったうえで、大学での教育（その中身とそれを教える手法）を考えてこなかったのではないかとこの自問に答えを見いだそうというのである。今の高校生の実態、彼らの価値観やメンタリティー、自分の人生をまなざす彼らの目、そのなかでの「大学進学」の意味と具体的な大学の選択——これらすべてが、われわれが学生時代を送った1980年前後とは全く異なる環境のなかにある。「大学全入時代」という言説のなかで、「大学へ行くこと」の意味もその選択基準も大きく変わってきているにちがいない。われわれがメディアを通じて知る「現実」ではなく、「彼らの実相」を生々の情報からつかんだうえで、「われわれは今何をなすべきなのか」に知恵を絞るべきであろう。

そのために、2009年度最後の研究会として、1月末には高校の進路指導担当の先生との意見交換を予定している。そこでは、以下を議論の糸口としたいと考えている。

- 1・今の高校生は受験する大学や学部を選ぶ場合に何を最も重視するのか。
 - ①将来の職業
 - ②大学のネームバリュー
 - ③学部で学ぶ内容
 - ④自宅からの通学距離
 - ⑤オープンキャンパスでの印象
 - ⑥進路指導教員のアドバイス
 - ⑦両親や兄弟・姉妹、身内からのアドバイス
- 2・高校生のキャリアプランのなかで大学進学はどう位置づけられているのか。進学指導に当たる先生方は、大学進学にどのような「意味づけ/位置付け」を与えているのか。
- 3・その意味づけ/位置づけに「応えている大学」とは具体的にどのようなものか？

- 4・甲南大学は実際の進路指導においてどのように位置づけされているのか。
- 5・「高校の出口」での生徒の質的保証の実態とそれへの対応策をどのように考えているのか。
- 6・今の高校生のモラルはどうなっているのか。「問題を起こす生徒」とはどのようなもので、その場合の「問題」とは何か。「問題」の質はどのように変化してきているのか。高校ではそうした「問題」をどのように把握し、どのように指導しているのか。
- 7・高校教員がすべきだが、時間等の関係で実施できない業務のうち、大学が協力できる業務とは何か。あるいは、高校教員がする必要がないのに、諸般の事情から時間を費やしている業務、あるいは大きな負荷になっている業務のうち、大学が協力できる業務は何なのか。

上記について率直な意見交換をおこない、今大学がなすべきこと、とりわけ甲南大学が応えるべき中身を明確化するとともに、甲南のブランド・イメージにも話を広げながら、進学指導の立場から甲南大学がどう見えるか、何が見えて何が見えていないのかという(文字通りの)実相と「現実」のずれを考えたい。そして、今という時代に必要な大学戦略の一端に何らかの道筋がつけられればと考えている。